

福島の 児童文学者 6 「水野仙子」

1888年(明治21年)～
1919年(大正8年)

須賀川に生まれる

女流作家として明治から大正期にかけて活躍した水野仙子は明治二十一年十二月岩瀬郡須賀川町本町(現須賀川市)に釜屋という呉服から石油、ランプまでも扱う商家服部家の三女として生まれました。(本名テイ)

祖父は静夫という号を持つ須賀川俳界の要人で、父直太郎は公立病院(岩瀬病院)を須賀川に誘致するために尽力する経済力と意識を持ち、家庭では娘達にも新聞や小説を読み、書道を学び歌を詠むことが当然とする非常に文化的な環境を与えています。

後に、兄躬治(もとはる)は、日本の短歌界に革新の風をもたらし、北原白秋等を指導する歌人となり、姉ケサは女医として、群馬県草津に日本初の癩病院聖バルナバ病院を設立し救癩事業に貢献し、テイと共に、須賀川が誇る服部三兄妹となつていきます。

テイは須賀川尋常高等小学校に通いその八年間は首席、無欠席を通し、勝

気でいつも仲間のまとめ役をし、又読書が好きで村井弦斎等の小説を手当りしだいに読み友達に勧めていました。小学校卒業後、町内の裁縫塾に通いますが、傍ら雑誌を読み、グリム童話の世界に浸り、若松賤子にあこがれ、盛んに少女雑誌に投書し、投書仲間の手紙を書き、家族から手紙を書くことを商売にしているようだと言われる程の文学少女になっていきます。

明治三十五年、金港堂は少女向雑誌・少女界を発行し、その歌壇の選者に、兄躬治が抜擢され、テイは強く文学の影響を受けると同時に投稿することを覚えます。成長に従い、少女界から婦人文芸誌女子文壇、本格的文芸誌文章世界と投稿が広がります。水仙の花が好きで、服部水仙・水仙子・水野仙子という筆名を用い、明治四十一年の女子文壇には毎月入選し、明治四十年から四十一年の文章世界には暗き家他六篇の小品が採用され、主筆田山花袋の注目を受けることになり、四十二年二月徒勞が応募作品中最優秀となり、作家としての道が開かれます。

女流作家として

明治四十二年四月、家族の心配と反対を押して仙子は上京し、花袋の家に寄食し自然主義文学の指導を受けます。ひと夜・くすり湯他の作品を女性らしい繊細な感覚と美しい表現で仙子の世界を創り、新進女流作家となり、

中央公論、新潮と活躍の場も広がって行き作品を次々と発表します。

明治四十四年、日本書簡学会機関誌・筆の香の編集も担当することになり、順調な作家生活を続けて行くかと思われました。

九月、平塚らいてふ等が起こした女流文学雑誌青踏の創刊からの同人となります。創刊号の表紙は長沼智恵子(後の高村)が描き、与謝野晶子、田村俊子等と共に、女流文学の確立をめざします。

同じ九月、作家としての創造力が失われてしまうと言う周囲の反対を押し切つて、かつての投稿仲間で、雑誌記者をしていた川浪道三(筆名川浪夕水・磐根・歌人、作家)と結婚します。この結婚は仙子の作家生活にはマイナスとなり、死期を早めたとも言われています。

翌年、夫は肋膜炎を患い闘病生活に入り、仙子は入退院を繰り返す夫の側で神楽阪の半襟・寡婦の秘密・少年少女向きに女傑ジャンヌを書きますが、精神的・経済的行き詰りから、大正四年読売新聞婦人部記者となり身上相談欄を担当し、聡明で誠実な対応に好評を博します。しかし、六ヶ月後仙子もまた結核菌に肋膜炎が侵され倒れます。

病床の中で

仙子は東京での病院生活の後、故郷に帰り須賀川、高玉温泉(磐梯熱海)、

猪苗代湖畔で療養生活をしながら、生と死、命を見つめて、道・一樹の陰等人道主義的傾向の作品を書きます。大正七年再び倒れ、姉ケサが営む聖バルナバ病院に移りベットの上で絶筆となった酔ひたる商人を書き続けます。

大正八年五月、病が更に重くなり脳膜炎を併発し、満三十才の生涯を閉じます。雑司ヶ谷の墓地に埋葬されますが、故郷の家族の希望により、遺髪を納めた墓が須賀川の十念寺に建てられました。

仙子の功績

没後翌年には、田山花袋の序文、有島武郎の跋文、岸田劉生の装丁、川浪道三の編集により、七十篇余りの作品の中から二十二篇を選び叢文閣より水野仙子集が出版されました。水仙の花のように美しく短かった生涯に多くの文学者から才能を惜しむ言葉が寄せられました。

自然主義文学の新進女流作家として、評価の高かった仙子は、児童文学者とは言われませんが、少女時代から雑誌に投稿し、作家となつても雑誌を主な舞台として活躍しており、当時の少年少女達には多くの作品が読まれました。特に女傑ジャンヌ・太郎と次郎は児童向きに、お寺の子・娘・暗き家他の作品には少女の微妙な揺れ動く心が美しい文章で描かれております。